

私なりの寄りかかり方

浜松市立入野中学校 三年 小野寺 美月

「人は誰だつて誰かに寄りかかって生きているんだ」私はこの言葉に興味をひかれた。本の帯に書いてあった言葉だ。この言葉を見た時「寄りかかるって、どういうことなのだろう」「寄りかかって、良いことがあるのか」と疑問に思った。その疑問を解決するためにこの本を読み始めた。

本を読み終えて、真っ先に思ったことがある。それは、誰かと支え合つて、何かをやり遂げるといふのは、一人の時よりうれしさも達成感も倍になって、素晴らしいといふことだ。真と梨々は、お互いを補い合つて支え合つて、一つの椅子を作り上げた。真だけ、梨々だけだったら、決して作ることが出来なかつたと思う。本の中にこういう言葉がある。「一人で出来ることなんて、たかが知れていると気づいた。誰かにまかせること。そして、誰かにまかされること。たがいに寄りかかり合う一〇五度の関係。苦労や喜びを共にすることがこんなにもおもしろいなんて、知らなかつた。」一〇五度とは、人が椅子に軽く寄りかけられる角度のことだ。この二人のように、互いに寄りかかってまかせたり、まかされたり、そういう関係はとても素敵で、大切なものだ。

しかし私は、人に寄りかかるのが苦手だ。もちろん家族には、たくさん支えてもらっている。ただ学校では、何か仕事をする時も、頼み事をされた時も、一人でやってしまうことが多い。自分でやった方が早いからだ。だから、もっと人を頼つて、人を上手く使えるようになるといいねとよく言われる。そのため、私は人に頼る努力をしている。

でも、どこまで人を頼つていいのかが分からない。頼り過ぎてしまつては、自分のためにならないと思う。そして、それが相手の負担になるかもしれない。真や梨々は、お互い頼まれたら本気で考え、真剣に取り組む。だからこそ、一〇五度の関係が成り立つのだ。ただ、現実はそのような人たちがばかりではない。人に何かを頼んでも、いいことが無い時だつてあると思う。

私は今、体育大会の応援団長をやっている。毎年体育大会では、各団で作つた応援合戦を行う。もちろん、私の団もクラスの応援団員と制作を進めている。そして、私はみんなに役を割り振つて担当ごとに制作していこうと考えた。そうすれば、人を上手く使えると思つたからだ。「〇日までに〇〇の案を考えてきてね」と言うと、みんなはしつかり返事をしてくれた。その間、私は違う部分の応援を考えていた。案を出す日。「じゃあ考えてきた案を出して下さい。」「…ここをこうするとか?」「こんな感じかなー」私はこれを聞いて、正直「えっ。」と思つた。応援団員の人たちはそれなりにしつかりしているし、もつと出来るはずだと思つた。これでは全体構成が見えてこないし、というかみんなから真剣さが伝わつてこなかつた。一方、他の役割の人でしつかり案を考えてきてくれた人もいた。その人たちからは、一生懸命考えた思いが伝わってきた。このように、寄りかかった時に、支えてくれる人もいる。支えることが出来ない人もいる。それが当たり前なのか。私が、求め過ぎていいのか…。だから私は、人に寄りかかりたくない。「一人でやろう」と思つた。だが、今回は私一人でやるには、荷が重すぎた。さすがに無理だった。では、どうすればいいのか。答えは一つ。みんなを動かすしかない。私は、夏休みの応援練習の時、みんなに本音をぶつけ、思いを伝えた。みんなは真剣に聞いてくれた。全てを言い終わつた後、みんなの何かが変わった気がした。

夏休み明けに、本格的な練習が始まる。これから、みんながどう変わってくれるのか、どんな応援合戦になるのか、分からない。でも、少し前の私より、成長出来たと思う。

「寄りかかる」と聞くと一見、簡単なことのように聞こえるが、それは相手を信用していないと出来ない。私はそう思う。だからこそ、この物語の真と梨々は、固い何かでつながっているように感じた。改めて、すごい二人だと思った。

私も上手く人と寄りかかり合えるようになりたい。そのために、まずは相手を信じてみようと思う。私は、誰かに寄りかかった時に支えてもらえないのが怖いかもしれない。しかし、応援練習の時のように、思い切って寄りかかってみれば、新たな解決策が見つかり、少しずつ寄りかかるのが上手になるかもしれない。この本は、私の背中を押してくれた。未知の世界を教えてくれた。上手いかわなくて、また悩む時が来ても、そのたびに乗り越えていきたい。信じ合える仲間たちと本音で、ぶつかり合って、支え合う関係を築いていきたい。

書名	一〇五度
著者名	佐藤 まどか
発行所	あすなる書房